

川本 節子の一代記

2026年

第一章 幼少期・生まれ育った場所

(0～12歳ごろ)

姫路の城下町に育った。白鷺城が見える場所で生まれたことを、子どもの頃は当たり前のことだと思っていた。大人になってから訪ねてきた友人が「お城が毎日見えるなんて贅沢ね」と言うまで、その特別さに気づかなかった。いつも身近にあるものほど、その価値はわかりにくい。

父は製鉄所に勤め、母は近所の縫製工場でパートをしていた。共働きの家庭だったから、帰宅後の夕飯の支度は姉と私の仕事だった。小学校三年生の頃からご飯を炊き、味噌汁を作った。最初は薄かったり焦げたりしたが、やがて父が「今日の味噌汁はうまいな」と言うようになった。その一言が誇らしかった。

五人きょうだいの三番目で、上に姉と兄、下に妹と弟がいた。賑やかな食卓が当たり前の家で、黙って食べる時間はほとんどなかった。誰かが学校の話をするれば全員が口を挟んだ。その喧騒の中で、私は人の話を聞く力を身

につけたのかもしれない。

小学校では保健委員を務め、けがをした同級生の手当てをするのが好きだった。血を見ても怖くなかった。病気の友だちに付き添って保健室へ行くと、先生に「節子ちゃんは面倒見がいいね」と言われた。その言葉が胸に残った。人の体の具合を気にかけることが、私には自然なことだった。



※実際の本には、ご本人やご家族の写真が入ります。

病院の廊下に行くイメージ

第二章 学生時代

(12～22歳ごろ)

中学に入ると、将来の仕事を意識し始めた。「人の役に立つ仕事がしたい」という気持ちは漠然としていたが、医療の現場に惹かれる自分がいた。高校は普通科に進んだが、卒業後の進路として看護の道を考えていた。家の経済的な事情もあり、四年制大学より就職しながら資格が取れる道を選ぶことにした。

高校では生物と化学が好きで、理科室の実験の時間が楽しかった。部活は新聞部に入り、学校新聞の取材や編集を担当した。誰かに話を聞いてまとめる作業が合っていて、インタビューが得意になった。この経験が、後に患者さんから話を引き出すときの役に立ったと思う。

高校卒業後、地元の病院で看護助手として働きながら准看護師の学校に通った。朝は病院、昼は学校、夜は勉強という生活が二年間続いた。きつかったが、諦めようとは一度も思わなかった。患者さんに「ありがとう」と言われるたびに、疲れが消えた。二十歳の誕生日に准看護

師の資格を取ったとき、母が「頑張ったね」と言って涙をこぼした。その顔が今でも目に浮かぶ。

サンプル — 実際の本は、ご本人のお話からAIが文章を生成します

実際の本は全6章構成です

第1章 幼少期・生まれ育った場所

(0～12歳ごろ)

第2章 学生時代

(12～22歳ごろ)

第3章 仕事・青年期

(20～40歳ごろ)

第4章 恋愛・結婚

第5章 子育て・家族

第6章 今の思い・家族へのメッセージ

(現在)

このサンプルは第1章・第2章のみ収録しています。